

## ストーリー

円山英治の日常は、大学院生にしてはシンプルといえる。そしてこのリズムは大学生時代からあまり変わっていない。昼前に起きて大学へ行き、講義を受けつつ、空き時間は主に大学図書館で過ごす。夕方からドラッグストアでアルバイトをした後、夜に自宅へ戻ると、父は次の日の仕込み、母やその日の売り上げを計算していた。大学院に進学したあと変わったことといえば、講義とバイトの順番が逆になったくらいだった。

父が営むケーキ屋は、小さな店舗ながら喫茶コーナーもあって、いつも常連さんの声が絶えない。どうせなら夕方まで店じまいせず、夜の8時から9時まで開けて、もっと仕事帰りのサラリーマンやOLの集客も考えたら良いのにと、ついつい経営学かぶれした頭で考えてしまう。ただ、夫婦ふたりで営むには、むしろこのくらいのペースが長続きする秘訣なのかもしれない。

もっとも、父は昔から金儲けにはあまり興味がない様子だった。今も、会計業務はすべて母任せになっているくらいだから、父はもはや売り上げなどの細かい数字は把握していないのかもしれない。ただ、大学院に進学したいと言いつ出したときも、理由を聞くだけで反対はされなかったから、特にお金で困っているという状況ではないのだろう。

実は大学に進学するときも、そのことが1番の心配事だった。例えば、近所に大手の洋菓子チェーン店ができる。あるいは徒歩3分のところにある最寄駅の改札口が改修され人の流れが変わる。そんな、街にとってはほんの些細なことでも、うちの店は致命的な打撃を受けかねない。両親とも、家の中ではそんなことは一言も話さなかったが、それがかえって小さい頃の円山を不安にさせたものだ。公務員の父親を持つ友人を羨ましく思ったことも一度や二度ではなかった。しかし父は、そんな円山の心情を知ってか知らずか、いつも黙々とケーキを作り続けていた。

そして、自分はそんな父の性格を受け継いでいるのかもしれないと、最近よく思うようになった。それならなぜ経営学？と思われるかもしれないが、自

分は金儲けよりもむしろ、社会の仕組みに興味があった。かつて浪人生だったとき、友人と近所にある大学のオープンキャンパスに参加し、その日、模擬講義を行った准教授が、

「社会の仕組みを学ぶには、経営学が最も適している」  
と言っていたのを聞いて、そのまま入学した。

そして、その言葉はその通りだったと、入学後に改めて理解した。経営学といっても、経営者になるための、あるいは現役の経営者にとって必要な知識のみを扱うわけではない。そこは世間的には大きな誤解があるように思う。最近では経営という言葉を使わず、ビジネスという言葉で学科名に掲げる大学も増えているが、円山もその方が実態に近いように感じる。

ただ、さらに言えば、経営学はビジネスに関する知識のみを扱うわけでもない。例えば、マーケティングに関する一連の講義では、製品やサービスを提供する側、つまり企業側に関する知識はもちろんのこと、製品やサービスを受ける側、つまり消費者の視点もたっぷりと学ばされる。そこには、文化、生活様式、収入、心理的嗜好、居住形態、街づくりなどまでが含まれる。円山はこうした一連の学習を楽しんでいた。

そして社会の仕組みの勉強を楽しんでいるもう1つの要因として、趣味にしている執筆活動の存在が大きかった。小説を書くには、幅広い知識があった方が良いのは間違いない。特にミステリーなどに挑戦するならなおのことだ。社会の仕組みを知ることは、円山にとっては小説の世界が広がっていくことと同意だった。

この執筆活動（正確にはなかなか執筆には至らず、プロット作りでウロウロしていることも多いが）をしているとき、ふと自分は職人気質なのかもしれないと思うことがあるのだ。それはつまり、パティシエの仕事をしている父そのものであった。事実、この前、高校生の妹が、

「お兄ちゃん、じっと座っているときの背中丸め方、お父さんそっくりなんだけど」

と言っていた。彼女は「背中の丸め方」と表現していたが、つまりは作業に没頭している姿一職人の背中一がもし出す雰囲気似ているということではな

いかと、一人前の小説家のようなことを考えていた。

そんな中、先日、同じ研究室の中島さんが

「せっかく小説を書いているんだから、どっかに応募してみたら？ 探せば結構いろんなコンテストとかあるんじゃないの？ そのときは、ぜひ読ませてね」と言ってくれた。

実は、コンテストへの応募に関する提案は、中島さんが初めてじゃなかった。もちろん、円山自身もそのようなことを考えないわけではない。なにより時間的な猶予がなくなりつつある。大学を卒業し、大学院に進学したものの、2年後には再び卒業を迎える。それはつまり1年後には就職活動を開始することを意味する。少しずつ円山の中にも、将来に対する焦りが芽生え始めていた。そんな中での中島さんの助言が決定打となって、人生で初めてある出版社が主催する新人賞に応募することに決めた。締め切りは3カ月後となっていた。

最初は、これまで明確ではなかった目標が定まったことで気分が高揚し、頭の中もグングンと回転した。だが、それは長くは続かなかった。

いざ、プロットを書いているのだが、人に見せるとなるといまいち自信が湧かない。気になって現在の売れ筋の作品や、かつての受賞作品を手にとってみると、いかにも自分の小説がありきたりなもののように思えた。

円山にとって、こんな感覚は初めてだった。これまで小説を書くことは最大の楽しみの1つだったし、そのために時間を作るべく大学院へも進学したのだ。そして自分の中での小説と経営学のコラボは思いのほか楽しく、いざとなればどんな小説でも書けそうな気がしていた。

しかし、いざ書くとなると筆が進まない。伝えたい内容のイメージは頭の中にあるのだが、読み手がどのように自分の言葉をとらえるか、ということに意識が集中しすぎて、表現1つひとつが気になって、1行書くたびに猛烈な疲労感を覚えるようになった。

さらに、よく考えれば、自分の言葉の使い方も正しいのかどうか自信がない。間違った使い方をしていないかどうかは、辞書を引いて確認すれば済むのだが、たとえ辞書を引いたとしても、すべての疑問が解決されるとは限らない。

むしろ、辞書を開いてもなお、用法が正しいのかどうかははっきりしないことの方が多かった。こんなことなら最初から文学部に進むんだって、ふらふらと経営学など勉強している場合ではなかったと、自分の進路さえ後悔するようになった。

円山は、書くのをやめたいと、生まれて初めて心から思った。

そんなある日、大学院から帰宅すると、父はいつもと同じように翌日の仕込みをしていた。あまりに日常すぎて、仕込みの作業などまじまじと見たこともなかったが、父はとても深く集中していた。手と目はかすかに動いているが、それ以外の体のパーツは本当に静かだ。息をしてないんじゃないかとさえ思える。むしろ、自分が帰宅したことにもまったく気づかない。自分がまじまじと父の作業を見たことがないのは、それが日常すぎるからではなく、子どもながらに父の邪魔をしちゃいけないという心理が働いていたからなのかもしれないと、今、気づいた。

その日の夜、円山は率直に父の意見を聞いてみた。母に何かを相談することはあっても、父に意見を求めることは初めてだった。瞬間、父は驚いた表情を見せたが、その後、少し考えて、円山にこう言った。

「俺は小説のことはよくわからん。そもそも文章を書くなんで、想像したこともないしな。

ただ、一度だけケーキ作りが嫌になったことはあった。ちょうど見習いを終えて、いざ自分の店を構えたころの話だ。新作がうまく作れず、明日でいいやと思うくらいのことは何度もあるが、本当に止めたいと思ったのはこのときだけかもしれない。

若かった俺は、自分の腕には自信があった。見習いをやってたころの師匠の味に疑問を持つことも少なくなかったし、俺ならもっといいものを作れると、心のどこかでそう思っていた。

だが、1から、というか0から自分ひとりで作ったケーキを、本当にお客さんがお金を払って買ってくれるのかと想像したとたん、自分の商品に自信がなくなった。ちょうど洋菓子ブームが到来していて、駅前には大手チェーンの

ケーキ屋が並ぶようになっていた。あんな店には負けられない、かといってこだわり過ぎても自分の嗜好を押し付けるだけで客は理解してくれない、という感じで、頭の中は完全に苦悩で支配されていた。

そんなとき、お前の母さんが、といっても当時はまだ付き合ってもいなかったんだけど、試食会をしてあげるとかといって、友だち3人を連れてきた。当時、母さんはOLをしていたから、そのときの同僚だったと思う。そして俺の作った試作品を食べながら、

『これはコーヒーに合いそう』

『私はこっちの方が好きだな』

『これはもっと酸味を抑えた方がいい』

と、好き勝手なことを言って食べ始めた。

そのとき思ったよ。自分に客のことはわからない。その才能もない。だったら作りたいたいケーキを作ろう。そのためにケーキ屋を始めたんだ、と。

それからはお前も見てきた通りだ。そうやって作ったケーキは、よく売れたときもあるし、まったく売れなかったときもある。そういう意味では、俺にとっての最大の幸運は、若いころに母さんと出会えたこと、そしてその母さんが今ではしっかりと金勘定してくれてることだな。

お前から見たら、毎日同じことを繰り返しているだけのように見えるかもしれない。よく飽きないな、と。でも仕事は本当に楽しい。作成途中のケーキと向き合っていると、突然、完成したときのイメージが頭に浮かび上がってくることがある。食べたときの触感、甘さや酸味の広がり方、香り、見た目の美しさ。仕込みだって、さっき始めたばかりだと思って時計を見たら3時間経ってた、なんてこともざらだ。これで家族を養うことができるんだから、これもまた幸運なことだな」

次の日、円山はやっぱり書きたいものを書こうと心に決めた。目標は目標として設定しながらも、それ以上のことは考えても仕方がない。自分の小説にとって、最も大切にしているのは何か。それは世界観だ。だからまずはその世界観をしっかりと形づくることに専念しよう。そのあとで周辺の出来事や人物を

当てはめていけばいい。言葉や細かい表現はさらにそのあとで構わない。中島さんには申し訳ないけど、誰に見てもらうかは、もっとあと、1番最後に考えるとしよう。

それに大学院の勉強ももっと楽しもう。最近は小説を書くための材料探しのようになってしまっていて、こんなことならストレートに文学を選択すればよかったと、そんなことばかり考えていたが、いったんそんなことは忘れて、社会の仕組みの学習を楽しもう。父親風に言えば、幸運なことに、自分には知識の吸収を楽しむ才能がある。

そうだ、もう1つ、父に聞いてみたいと思っていたことがあったのを忘れていた。父の作業姿は嫌というほど見ているが、そもそもケーキ作りに必要な知識をどうやって習得しているのだろうか？少なくとも円山が知る限り、家には書籍の類はほとんどないし、父はインターネットも使わない。今日、帰ったらさっそく聞いてみようと思つた。